

暮らしの中の木材

第12回 楽器用木材の性質（2）

－ドラムの音を決めるのも木材－

木材利用部 原田真樹

音楽を演奏するための楽器には、弦楽器、管楽器、打楽器などいろいろあります。その一つである打楽器は、楽器を叩くというシンプルな動作ながら、実に様々な演奏をすることができます。音楽が好きな方の中には、コンサートやライブなどで、ドラムの熱い演奏を耳にした方もいるのではないのでしょうか。今回は打楽器、特にドラムを演奏するときに用いられている木材について見ていきたいと思います。

ドラムを演奏するときになくてはならないものといえば、スティックです。スティックは、いうまでもなく、ドラムを発音させるための道具です。ドラムを演奏するとき、一般的には、スティックとドラムとの接触時間が長いほど重低音になり、逆に両者の接触時間が短いほど軽快な音になります。また、重いスティックの方が、軽いスティックよりも接触時間が長くなります。

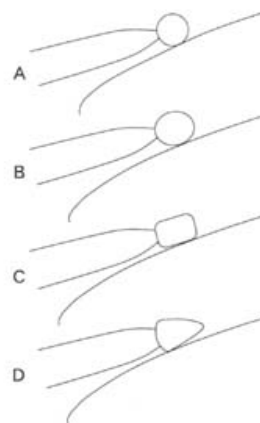
スティックは、「チップ」、「ショルダー」、「グリップ」の三つの部分から成り立っています（図1）。チップの代表的な形には、「丸型」、「卵型」、「俵型」、「三角型」があります（図2）。チップの形状により、打面に接触する面積が違ってくるので、発せられる音質が異なります。特にシンバルを叩く場合、その差は歴然です。ショルダーの形状は、スティック全体の重心位置を決定します。ショルダーが太い、もしくは、先端に向けて細っていくカーブが急であれば、重心が先端寄りになります。グリップの太さは、スティックの握りやすさに影響を与えます。握りやすさは、人間の感覚に強く影響するため、市販のスティックでも、細かく設定されています。つまり、スティックの形状や重さを選択することによって、接触時間等をコントロールし、表現したい音を作り出すことができるのです。



図1スティックの形状

ところで、店頭に並んでいるスティックの材には、「オーク（Japanese White Oak）」、「ヒッコリー（American Hickory）」、「メープル（Maple）」の3種類があります。これらは、必ずしも特定の樹種を示しているものではなく、いわゆるコマーシャル・ネームです。このようなことは、スティックに限らず、木材には間々あることで、名前が必ずしも樹種名を示しているとは限らないのです。あるメーカーのスティックでは、「オーク」には、平均密度900kg/m³のシラカシ、「ヒッコリー」には、米国産クルミ科あるいはその他の広葉樹材で、平均密度820kg/m³の材、「メープル」には、樹種を特に定めずに、「ヒッコリー」より10%程度軽い材を用いています。この場合、樹種のような名前は、実は、密度の違いを表していることになります。あるドラマーは、形状がほぼ同じスティックでも、遠くまで音を響かせたいときには「オーク」を、軽快で抜ける音が欲しい時には「ヒッコリー」を用います。このスティックの選択は、木材の密度を考慮したものといえます。

叩くというシンプルな動作からいろいろな音を創り出すスティックは、どのような演奏をするのかイメージすることにより、形状や重さを適切に選択することができます。木材でなければ出せない音、木材であることのよさを知っていることが、演奏技術と相まって、演奏者のスタイルとなっているのでしょう。



A：丸形 B：卵形 C：俵型 D：三角製

図2 チップの形状